萬葉集代匠記

二十上

和書門
類 八五三六
號 九四
函 六
架 三〇
冊

内閣文庫
和書
類 八五三六
號 三〇
冊 二〇〇函 一五
架
(八二一オ)

内閣文庫		
番號	和	8536
冊數	30 (	30)
函號	200	130

国立公文書館
National Archives of Japan

萬葉集抄第二十目録

幸行於山村時先太上天皇詔陪従王卿脫

同七年乙未防人等歌七首言七首人上進

遠江防人歌數也上是防人歌惣標也混

惣別甚非矣當刪去也

坂本朝臣人上進歌七首

七誤作三

藤原朝臣宿奈麻呂進歌三首

三誤作一

息長真人國嶋進歌十首

誤第十一首

信濃國防人歌三首

三誤作四

正六位下上毛野君駿河　脫下之字

同二十二日兵部少輔大伴宿祢家持　三首

此目非也

當辨上目云同二十三日兵部少輔大伴宿祢家持陳防人悲別之情歌一首并短歌或具云短歌四首別列挙武藏國防人

辨見于仙覚律師後批

妻椋椅部刀自賣一首

部誤作郡豊嶋郡上椋椅部

荒虫之妻宇遲部黒女一首

｢荏原郡上丁物部廣足一首

荏誤作荏

妻椋椅部弟女一首

一誤作二

二月二十日（上云同二十三日上野國防人部領使云二十下恐有脫字然至下亦如不可考）

今案删別等繁重當准上云同日武藏國部領防人使掾正六位上安曇宿祢三國進歌十二首

昔年防人歌八首

全脫

十八日左大臣宴於兵部卿（脫姓）三首（三誤為一）

天平勝宝八歳太上天皇太后（脱一字后誤作右）
（後云天皇太后却刺一太字亦孝謙記）（當云天皇太上天皇々々太后）
馬國人至下同然恐馬下脱史字見于歌
左注

二十三日集於式部少丞二首
二誤作三

勝宝九歳六月二十三日云々
大伴宿祢家持悲拾物色変化作歌一首

天平宝字元年肆宴歌二首
脱歌字

年月未詳歌一首
當標題云藤原宿奈麻呂之妻石川女郎

薄愛離別悲恨作歌一首

二年春正月三日云々
此日誤矣當分標目云二年春正月三日
王臣等應誤旨各陳心緒大伴宿祢家持
作歌一首為七日待宴右中辨大伴宿祢
家持預歌一首

六日内庭假植樹木以作林帷而肆宴歌一
首脱作字帷誤作惟

幸行於山村之時歌
欽明紀云元年二月百濟人巳知部投化
置倭國添上郡山村今山村巳知之先
也
先太上天皇
哥れ後の注ふ　勝宝五年に山田史士麻呂に家持れ
聞く勅く遣ふうしなれハ元正聖武天皇をは共太上
天皇と称き勅る口號　雄略紀
あしひきれ山ゆきしかハ
山村ろうふよう山のゆきしふしうませうくり山路とハ
花ねきふあうひハ蕨を折ところをおうみしてあまりそ
帰るとい子て中ミまハ海農ともうく中ハもれ石ゆきつく

かかりさくせ山人にのゆるハ仙人のまねひたしつまて
えしわい山はにさ花りこちをおやしく翔せさまふ
を仙人にしてつまるやうふらさなせのふたつ也し
わしひきれ山にゆきなん
山人の心とも志をもとハ仙人れ君にすまれんんたいうふおりひ
てわりれんも志れてしるのすりれん山人ハ非ふさく
さふひりなとしかくうさうひてささわねやうふ仰の人しを
ましのするをかへりてくいなひするんかなりへし

請問之問少主鈴
後の問ハ問なりし
主鈴者職員令云大少大
主鈴二人掌出納鈴印傳符飛驛函鈴事少
主鈴二人掌同大主鈴少納言令義解第

一末云少納言三人掌。奏宣小事（謂公式令謂詔請）進鈴印及賜謂遣鈴印傳符進付飛駅衣服如此少事之類是也函兼監
官印（謂唯得監視蹈印其印玄依律長官執掌也）其少納言在
侍従員内延喜式第十二まつりて主鈴
式紙許あり
ひもときあるかなてなしきまて
蛸風の源しさふひもと紀あけくんとゆるへしくあれこんか
いろうしこ左ふもましりね附れてくふあれそとなりり
君のうふあし進たりし執
さらしふりくともりをたかししとい今君乃さしまつ
かわし進みへふりれ云いやまりしなるとかれハかくいつくる
手て

年月をあらたむるに

正月になれは年月もあらたまれはあらたまりしくめてたし

しあへるも物あらたまりてなくめてたしされはあらたまりて

ふのとしみのとおりへは

いつまくもうけられふれしくふしくえんしおりへいなり

七日天皇太上天皇

孝謙紀云六年春正月丁酉朔癸卯天皇
太上天皇御東院宴五位已上右勅召正
五位下多治比真人家主従五位下大伴
宿祢古麻呂二人於御前特賜四位當色令
在四位之列即授臣下 おりふし附日なり

いふこゝろはあのゝかしこし

色ある物といふ勢の字ば衛ともあるむしとひふまいる
よりあり橘といふも勢しく色沢あるをといふあれ
葉の色沢も勢するもの色ありをあ沢るさふり時
と君もあまたをおりふしいつもけれとも橘麿呂な
れはいみしきをといへり

安宿

河内国安宿郡は和名鈔に安宿戸郡とあり

天平九年九月己亥無位安宿王授従五
位下同十月庚申授従五位下安宿王従
四位下十年閏七月従四位下安宿王為
玄蕃頭十二年十一月甲申朔甲辰従四
位上十八年四月従四位上安宿王為治

部卿勝宝元年八月辛未從四位上安宿
王為中務大輔三年正月己酉正四位下
五年四月播广守六年為兼内匠頭宝字
元年六月安宿王及妻子配流佐渡宝亀
四年癸卯朔戊申安宿王賜姓高階真人
山田御母勝宝元年七月甲午受禅乙未
正六位上山田史日女嶋授從五位下天
皇之乳母也勝宝七年正月辛酉朔甲子
從七位上山田夫廣人從五位上比賣嶋
女等七人賜山田御井宿祢姓宝字元年
八月戊寅勅政臣下山田三井宿祢比賣
嶋縁有阿弥之労褒賜宿祢之姓思波狂
激餘及傍親而聴人悖請不奏丹誠同悪
相根故為蔽匿令聞比事為堅舊臣山田
史
而不攀誦
攀ハ挙なる通し
おのれのしけふ
おのれはしまおかへりしおのれ閣に今しかしまも
今しれしとしい物体かく今異らしに
うしそけふ花のよろうちへてく
うしそはいつもしれんくはかう異れ字とあうへていなされら
つくくえ
袖をとゝ形勢まつへんとし

難まつんとしハ花やうまつへともり倍れとつまよふ比
ハ花の多とハふまくたりし奉りこしふにおりしられハ
花やうまあへんとてそ問をハつきと始まれるしといひあそう
秋風にうひく以色のにこ葉乃
皆之すも蓋垣れ中のまこ葉ましよふ以色てあしして
人ぶ去しらふ東ふ防人れんを家ねれはまれたも奇まうて
れ葉ぶれをしのまこまさもれまそれ流しあ布須ますと
いとり

布勢朝臣人主

史記云 此れ守ふ列り石休役っそ任發擬しそあり 守廣嶋より的甚皇后紀

勝宝六年四月太宰府歌人康第四舶判
官正六位上布勢朝臣人主来泊薩广國
石離浦同年六月授従五位下同月為駿
河守宝字三年五月壬午右少辨四年正
月為山陽道使六年正月甲辰朔壬子従
五位上七年正月右京亮同月文部式部
太補八年四月上総守神護景雲三年六
月丁酉乙巳出雲守

なかえけるたちになりても
海ゆきける太刀

日下部使主 此頭云於 宗紀
三中之母歌之

たらち袮れたらをわのまへく
あまへハ主中ゆ返しして

とゝくまれたるときにしと
ゆくまれくがちをときそ又八十嶋の海とゆのんし海陸
の営ばいぶまりくまゝやれしま前するやうすり
にいなられわもいれ神に
上総国は阿波方の物部なる神のまもりもそその神にいの
まもんもくいは庭に小宗をさしてあるとれるなり
し総の物部はいはるしめ見わけとも前用的上長流るお
まいなり今宗あまれの神は延喜式にも載せ貴の續日
本紀被書たるに　元正紀養老二年五月甲
午朔乙未割上総國之平郡安房朝夷長
狭四郡置安房國　聖武紀云天平十三
年十二月内成安房國并上総國

孝謙紀云天平宝字元年五月飩登安房
和泉等國依舊分之　今は勝寶七年ふく安房を
上総にあはせられたる時なれは安房の名はなくなりしとも中むか
又はなれあはいの神とはいうまでもなく総の物部は神のやし
ろの庭とまうらたれたるとみゆさらはあはの神の庭
とまうらいふへきれ庭中のあまいれ神とや延喜式にはなりしも
わのかたにまりするえ何事をもさしいはあまりあまいの神
かんかゝも延喜式を前の神を面載例に小宗をたもいう
くふもすなへきふや
　　　皇極紀云二年春正月
是日国内巫覡等折取枝葉懸桂木綿
伺候大臣渡橋之時争陳神語入微之説
其巫甚多不悉聴夏六月。是月云々　全如上

枝葉を志けくとかけるを音訓をましへたるハあらハに見えて
て志けれたるよしあり三通坂本綿をとらくるに似たり
今小葉さしといへるも二通にたしかへきんへ色し
なひあふるもやつきさゝらく
やつしつきくとあるを誤りし例にこそしし例虜宜し
なり

望陀郡 和名集云末宇太　玉作部国忍

うちぬへのうまくれられに
うけれあつりるはまあれハるふまあれなれハ扁豆の事な
海へし　和名集云䕸色立成云藊豆 藊音
邉 又比顕 又和名阿知万女 籬上豆也 まあれうつゝふるひかく
あまくかしかりてくありひまつハまてゝ君に別道そやゆ
かんとまりこそかしまる君とはすてに旅衣のあめひやまし
えしとまる心也

天羽郡 上総

和名集云天羽 阿末波

いへるせハ日本にしふ事と
我家の風かくよりの吹来風の心かくれ家風といへるなりつまより
家の風とよめる義にあたりつり風とは仮にかたりしにかくれゆへに
かへいつりてハ家言といへる家の親書なしれかゝることをきく
くる人ハなし之

朝夷郡 安房

和名集朝夷比奈

さちこそれさちのさくほま

かりこもハ立ツ鴨なりとふ乃ならねとあれハゆかきしとある
小同し、
長狭郡 安房
和名集云 長狭 奈加佐
よろつのこゑそやまさるゝと
わうらとハまうらんし古きハなまハよりの両まゝある鳴かすとの
遠く見ゆるふうけくふつうしとかくよれふおくこゑそや
まうらんとよめるし
わうそれ神のちるそく
古まは母うとつうられ神とのちなるしまきこ白ろく時の
さまく又出つる我神彼うちなつるとも字ゆ教の子をいさ
しろの時れかしそをすれハたちゝ子のそしうきなそしも
又そうそハ乃そうれらとあきことのすそつくあけうきなそとも
よありわうかうまとハよれ抜とれ心やわまうつえ夜ハまそうしれ
ぬなり延彼延ま例ゟハおやまりし
あしうきれくまとまさちて
くまとを長流ハくらこ戸とも不心もしうりりくそしうる戸口り
立出てしはうらて時のさまなし今案隈(クマ)所(ト)なうくへし女ハ人り
赤のふとのなれハ垣のまうまるく海みとふ立く神もしほう
ハト用くしなきしれもハ中まろきしれ物もいうやうと
沫く同類之
まねとうつゐくいひしこ排いも
まれま夜つきなり寸十四中もろへこ排きわねふこふなともと
まありいひしハわうまかうきしとといひしこし下ま家持

の前よりの葉のつまりハこりつきしともあるかにおほしく候ゆる
こ道ハ書たれハ書ハいつこと候なんと

種淮郡

此郡の名上総 郡 安房四郡の中にてハいにしへ
よもすゑのむかし此名にて海に路ある道のあとしハ書あ
やまてかれ

流くしけるへむかるみすれ
つくしつそ紫紫道にて部道玉道とふかきしへむりの海
舟をつむりる舟につくつきれのつくし此方へむけるきし下の家
持の長前にも舳なまてつむけこんとも以下にへむかも
いつる船ものつて舳(ヘサキ)前のむんとと

上総國

古語拾遺云天冨命更求沃壌分阿波齋部率往東土播殖麻穀好麻所生故謂之総國（古語麻謂之総也今為上総下総二國是也）

茨田連

文武紀云二年八月戊子朔茨田足嶋賜姓連和名集云河内國茨田（万牟多）郡

陳私拙懐一首并短歌

懐下𣪘（殺）脱歌字

今のをふまえ次いひつく
も流のいとく今のをハ綿とよふ年の流くをとあれとと
いふんふくしきえんとハつゝあてつりしきさかへうりと以下今
東中予中十八よいまのをつくしもり若洲とつ此界ふく

今のうつてのくにやかんなからう大君のうちなひくまた
なしめいは大君のうちなひくとつくるは四方をまとめかり
まつろきりて後のめしまひあきらかにめしまとひしつゝつ
くし山貝道八又のとむしくめつらしくしことひきしつ
かちひむれかりあらむとしれさとまてかひて白波の八重をか
うらへて晴よ崇よ尓そとらあまるをゝいらくふうおそてち
てしよう可かなり　神代紀云若沫雪以蹴
散 蹵散此云倶穢 簸邏邏箇須 おのえれちりしちるなりいふも
あれなりへしきすにかりこもれとて道いふゆあまれつゝ
ふすといふしや　史記夏本紀云其土白壤
孔安國土 無塊壊　孔安國禹貢の注の心にそらへてあり
いふ和漢をくらふにちまても今の土民なとつちれるくしなか

をあらしとまろうとしいつるふかゝりしかれは散れ字の心ふお
なしとい此字を散れ字にかへて用ひしはを異しとそうれ
くもいれこかくし門してあるおきつろきうもまた旅藝呂と
かかなとありつふ顕れ字たりへし盖深雖見也と注し
これは今いふんいなれ歴ゑていなりくかつきなとあり
と君の大けふとくあまりもれいさりして注しててれ
さうかともこくすつるとられてとくほそゝろきなかして
あれてくとゆるのしもあきさくいあくてくしあまり小船の
ちりみされ奥よりくまれしつきせぬとられは海いれことく
ゆさかなりとしあくる道いしと上をふそてあくことはさくれ
いらりいへし神代より難波宮をは重創しあらひられなと
此神代よりのいは仁徳天皇とさしていつてきたゆ

桜花いまさかりなり

おほしも桜のさかれは今さかりなりし御代をさかゆる
中六年十二月にかしてこやなきかれといふま防人とかるるに佐
てもみつしれ防人しのふより概言といせるよしをいふは武
かしてる京とあるにいかしとさかえゆくへし中にに
防はおほく御筆の京のいふすくれ今防りてありつるさくは
つらせこふつとさすくはおよ山の防しれ花の今防りてあり
うかりし中にけ地の防く
海上れひろくしとあるを世のまつり志もれゆるやうるるま下れん
いさせるさへしすこよ
防京れ防人様れたれなりのゆふふえへてなとりたまわし
あしちらいよふなえこそり年は起ねへくとさす六よ

防人らくかみしんにもちりの船に乗れ居ねみなと
とみなとおろすまし
おろしすゑてあさ夕潮に舟をうけすゑしありやうれらねれ
はやうちねむしてよ十二字八十梶貫といへるにあかし櫓櫂
八十ヶ所ありえ出かかる船ともあるし今にこ舩かけしは今は
漕かくいねるとこねといふうるにたれ字をうけて車おもふきは
とまこ

さきむりまたくむさまき
さきむりはさきもりこし家のいまもりあるへきなとをいふすきねか
そなはるへきは産業になくつとしむこ　毛詩云王事
靡監不能蓺稷黍　宝字元年八月詔云
太宰府防人項年差坂東諸國兵士発遣。

防人産業亦難辨漓　史記高祖本紀云
不事人生産作業　孟子曰民之為道也
有恒産者有恒心無恒産者無恒心
此集中五ウ
名のる丸天路はとをしかへりては家ちかきをりくちをしきかな
なるべし
人民らしる田はうたまけれ今更に人にまつはれてあれはいふあまし
大宰筑前國志加白水郎か爲に
あかをはいめこれ産業をえあらはすなるとしれやとせとまてしるき
海すん
此是此下かもおもかこひまもるうまし活しりとしありいと
まて立しとくのゆかりまくれ産業れやうをもいひおかで某

ぬかはとんもとなくおりふゆし
もちさしゆかむ鴈もう
鴈の使の前かりまありしるしては記して附くなり
詩云寄書雲間雁為我北飛
あかもてれまあれもしされ
のおもてれまあれもしてゆくすす十日にもあかおもものされ
まん志されともおもかされのまたしなとももあかりのを
れも志さかくのまれも志さうのかくなへしえしくなりさ
のおもうけをりすまもせぬ清くる山をあふきくなさり
とおりひさく志のへしくおとことれ女を山をまあふく歌け
まのく尼ハ尼の謡し
としかもく情あくありまさく

くしかたくハ久慈郡にある母しの千田にいたれにある主君
をさしていかせこととゝいつるかたとしさなくありまてりけ
くありくまてゝしから舟ハ河舟に篤して海れ舟をいふなし
世毫の下なもあり　佐壮
ほくゝよれさゆるれむ
さゆらいさゆりゝゆとしとうけて田ことゝいうり田ことゝ
おくとこしやまれかるしけいこともかゝれしきゝ夜ゝさく
らをかそしてあそれかりとおりふ人ハ色なもあそれなる
をおそろしき海上御座りて約のくらし年月あいらく
あらんおしたゝしおりひつるへきゝを出ものもかすりきしと以ひ
てこあしまく
あしきありかしまれ神と

あし道の音れかしましきとしいひてあまつあしらかハ今ま回し
まありとくきハすありとをいくさまて皇御軍し
生道ハ龍波山の橘まもせしく青かりつりきん給ふひとく
めやしい心なり
橘れ下吹風れ
あしくれとさのことりり
中九に足插坂を多かるくあつまれくふのかしこさや神のさき
うよなしもありくまりりて長流の抄にたハ助まつしそこ出す
ちるんこと以う今案足插坂かりとえこてことかこしらりた
を弦るといつまこされそこそかゝ色りつ人をとそはいあくか
めくしゆくを趣旨しあしをもうしやそてかるときゝ良し
ハ立なり様ちふあらしれ以ちとももそくかしれ志ひてかなり

ふそれせ紀にへつゝゆく不破の関をこえて我はゆくらし馬
のつめつくしのさきにとまりゐてあれはいはゝむまつまりゐり
廿十八にうまれ法あいはくすそれいことにいひしらふれてんうと
走り此集に馬と字書しのしきうちふ志ふに年此字を
かうひは本意放なるへし今れ世はか應りてきまかけるやう
を用ゆ椋もおなしちまてわくいとまりおてもろくは衆
諸緒ノふかくあまされんくなりさけくとまうすへきくまう故
せとゆるなり

息長真人國嶋

宝字六年正六位上息長丹生真人國嶋
授従五位下

志このゝたて生ゝ川よれい

志こなしきれ志と川おきなしぬしおしなりてきまて於きまし
いふらし早下志くふうり身を罵辞くふうては御楯
毛詩周南云赳々武夫公侯干城崇峻紀
捕鳥部万日万為大皇楯将効其勇而不
推問翻致逼迫於此窮矣　國れあまらふせらんと
敵軍れ矢前此楯となるんなり

火長

令義解云凡役丁匠皆十人外給一人充
大頭 謂火頭者厮丁也執炊爨之支故日大頭而給功直與見役者同也 又
云厮猶使也　延喜式左右衛門式云凡
撿挍京非違者佐一人尉一人府生一人
火長九人 二人看督二人案主四人佐尉従各二人志従一人府生二人

凡捡非違使別當先隨身火長二人凡捉
人防𨿸火長七人三人守獄所未弾四人領着鈦同
門厩亭便令守門火長衛皮別致非理凡諸
者奪其料充脩理料凡毎月晦日掃除官
中者差将府生一人火長四人造民部
省

さりやぬきれくしれ諺と
さつやぬきハ蘆矢柀之蘆人れとつらるりしくらを蘆
ちといへてりれ尓ふくさり矢とはいつく射の字的れ字を日
本紀ニ共ニ去すしとあり此集ニ寸十六ニと射の字ぬきして
ともりヌらいるとかね紀にくりいよ的にと以て氏姓とも鉄を
射とかしけるゆへ小賜まする氏とこれハつくしとさして行と
きつり矢をぬき出してつくしを的ニかしくいてふしいふ人て
終ニ侍りけり
まりれけのなくしるつえ迄て
松れ木の並くをそれらしいハ家人之たかりしもあるハた
てうしうてもし之背れ背十尺ニと出るともあり稚代紀ゆゑ
若れ字程もあり着と如しおすしんて哥れ心ハ尽をふ尓松尻
本れなしひてさくれをされハ山家にあらししある人れおゐる
とくるひてうそりいちしあらしとゐる尓ふつけて於
ひ出れあり又此集ニ松をおゐくゆふつけくかよいけてま
あれい送るへられくちくゆ帰ふるゆ川といひんんとも
りへてくかりゆや
あもしいい

あもハありてこそ母く 母とありしよめりしハちゝそ 父也
おもしゝどきすてハあやまりてこともの[illegible]ね萬葉集にも
ハおもしそね萬葉集にいへりるとあるもつまをあれ字を古止と
よむへくやしけハくやしきことなり但ハ立府の句ハあしそ
かくされのりふさ達そゆんともおして日ころんれゆへなり
あそともやさりしろくやしきなり

寒川郡

和名集云寒川（佐無加波）郡巨老（於保於伊）

あもとしもおまもりもや

あもとじハあもとしふく母刀自也こゝろりハたゆまさるなり

和名集云四声字華云鬟（音還 和名美豆良）屋髪

やあへまくもとあひきりましをとし中三市東玉穂小

いつき紀のまそろ玉ハやつりつしおはさかつさも君かまにし

法華経第五安樂行品ニ文字をふりつ

神代紀上云便以八坂瓊之五百箇御統（御統此云美須麻屢）

纏其髻鬘及腕云々上ニ一天之

瓊とハ瓊ニ字の注ニ瓊玉也此因妨かれハおもれも

五百のむをとりくゝりしとたゆまさす川のせかきなし陪氏抱

注玉髪ニおれおかしゆきすん女きてすくてふうけきまし

きハいとかるしけるし多くなかりしろつはさらしの君とお

りひゆくいてきまろんきけるそまつへしか

つくひなる

月日夜ハこ月ハ月次日ハ晝こすくるあけくもいてハゆ

あともくありしハ上のことくありちくこいすれをかまハ

いつれせねくもなくてすれぬへし
やゝひうてなる
八度神なることのおほきをいへり
なにはとは
難波津とも又難波門ともきこゆ　いとまなき根に雲れまよひ
くらくは旅ゝの苦死なにあらに難さ人雲まよひゆくらく
神麻續部　かむをうみ
なさかりをあしけひとつ　此なさかりを以て洞まて次あし
けひとつはあしき人なりといひてこれはなさかりをは此さ
ひさきりをもかし立る神とをれしまる洞しまこ
ゆあきゆきひは厚病あるひは異例のんなくあさやきひ
といふれやまひをうつしきしてさきりのまさせあしき
人ことにいへり
さしてもとは紀に
立なん時なく　泥は濁音なれは立なん時してなをとふにいへる
あしたあしかもたおもらかもあまねくまにんせいやしいなへし
田口朝臣大戸
宝字四年正月　正六位上田口朝臣大戸
授従五位下六年正月日向守七年正月
兵馬正八年正月上野介宝亀八年正月
従五位上
あかしものあられ時に
あかしは暁やかてあれとはさら迄はあれ時とよふなんとしてか
迄時といふなすしなるそゆく人もあかつきとおのなれは人此か

かとおれと又ゆきかよひて名おりをきけハゆくへをもわかさ
ぬ時よりひ暁をもしられけれ時しいふへきをとりつとむくてう
これハ夕ふいひかよひて暁まいらくまとあらそしく物ぬへし
源氏物語須磨巻に若れ君すかて少ゆかり世れとりふうち鳴する
ま浦おれひとやうしかひをもうけてあれいふれ時ちうかふとりけり
かくれ時といふまおもしろうりちをきをもしまうけをくこきま
し舟ハこきいすしすく此奇ふかく明石浦れ朝霧ふかくまあ
海哥をとへいうくうひもそれねへし

他田（手佐 田）日奉（末 續）得（得）太理（止古 足也）

日本紀にも此条ふも同名也

由古
ゆくさ紀ふあとまかしとゆひ

ゆくさきふ浪のおとしめしひとしゆへひハ陶こ又ゆくさ紀ふあさ
おしぬるとおもひ進とにいひをえしひともきよめ志るへふいく志
すへてよいハこそうつまをしおきてらもまぬかへ川の良ゐし
ハとゐ物語ふく子路素をすくおきてしまうかとまへり下れ
白しりきつるて進ハゆきさきふ浪れ着ゆるし成へし進退雖
皆といふなるへし

葛餝

和名集云葛餝（加止志加）郡

いつかわれいつりと柳

いつかわハいつかわとしいつもと柳ハ　文選陶淵明五
柳先生傳云宅邊有五柳樹因為號焉とい
つもと柳をうけくいつもしといふり中ににいハ川上のいつ
もれ花のいつもしとよめる中十一まきえの人のいはく八来れ

いつもとつる出雲八雲たついつもはいつものいつもなりと
侍けるをはいつゝ出雲やうにおほしおもかたひすれハ母か
こひしかりけれはしも侍る家の妹かなけき人に歌
いひおきねかもとおもふにおもひやるをひとてよし
侍りしかは此ちからし又古今集よりハすなほなるとよめるの
を此集中すなほをすなほなりとよめる振の字を用ひしとも ふ
くともあるんにちゝになりけりしのときいへりハおもき
まし侍しにといへるやすみてましくほゝんのゝし又今
業に母といへる助字ちゝぬくはしかなりし同字のかさなる
時この國をやうくく此哥の神の和加々都の字とかけるく
今かくのことくすゑハこれも郡の字を加へ○をかきて母か
名をおもひせんなたきましてもといふんによりや

知

波乃ぬの

ねを此集にやうくれもよそへれて今ちかの形のまたも
字のまゝにはまハ五音相通にてんかへしこのてうしいへす千
ちはも讀りかきれといふてまれにかくいはゝ其の記しきて
てねくこまハちゝ竜女なりしにちかきまろかこれてうしいのひ
らけねやとに似たる物なりつかなしきことのはおもふをさまも
あふあらそてあまハのこゝしおきそていろいろに東ねとそえかと
ま人丸の哥にかすかなる小山もてるまねとよめるなんく
ひとへいはまさびまなりね
こひとへとハ旅といふへし猿といへるもよそへしれ猿ハこひとも
すしつゝ旅すれハまことにわひまれなりし道といふかへしいへ
れもかいといへるかくて日数かさなんに見てよりさくてれはまさひ

まかりねしといひしはこれ第十五に

我旅は久しくあらしこのあかる妹かころもあかつくみれは

墻舟れ

上にも第十にもうてりへしれ志つ波は舳越志うあらしなり

にいふしくもいふえにふしるしくもは舳先に舳をとく浪乃

いふすへなしもなきことくにいふふしあふせなかからは御

弦ふるなして（かりれ）ありむへ称しまいありひあへのしまし比阿及波

や何をもありひあへいれきさ行んらし

印波郡

和名集には印幡に作れり

むらさきれくらふくきけし

むらむは群むせ第十五にしるむれいかつけしひとしるうま

としるいふるめくとしくき八ふくうか波し美し同前よそ通せり

和名集礼記注云綫 音綫 和名久美 所以貫珮玉

相受兼也 も流いくきさしめとしいかくししてしま安

えかうあてしももさ由第十四にハ大船をへゆもゆもかとさ

めてしとあありもうもそてはいかいもうなりとあかくなるうとも

あやうくあかもし世字及由なるを又三五五在通すれは用

よりまて英は五音通すれはあやうくなあかりといつるまて前

これはむさむのくろめくちしくふくいうなるへまつんとも志

ら波をはらをくるあくみしし語をぬきさうさうてくちあり

かあてあつ連八ふるふ川連くれもみふハ妹かんきいふかり人とあ

やうしくありふんいなしとふし

猨嶋郡

和名集云猨嶋 佐々万

あかこひすらん

我をこそ恋しゝらんや恋死らんといふはあはれ恋ならんと

おもひしれいつまでの命を

天神地祇の中にいつまでの命まいのりてあふりうくるつくし

いとおしくしてをさま毎に

垣生郡

和名集云波牟布

おほきくしれみてこまされい

足下にあまりあまりいふなり之阿及佐也公羊傳云不以

家事辭王事辭家事といふひとつおなじてはあらそき

ましてといふんは大君のこととなれは家をはなれ

よしてけは民の道をさりしもちつくをいれの秋よろ川ことと

そいとひおきて出しこそしとのそこに斎公(いんヒべ)尾は上にあ

まさまなり

ゆきのまま

黄れふふふまさとのみ給ひてこおりきこのまゝと長きを夜

なり

ゆかりまれね

とは時よし骨十又骨十九骨も時給とのこしある奇あり称は注

称し命を通せり

独見江水浮漂糞

哥に許哉莫しまかりて七骨十七骨十九まあるは本積と云

里本の屑しつんすれはもし本糞なりけ所を本の字給お

しせるはやさしく候は上の書く日本紀とは書かれたるもこつと
く彼しるくおしことひかすや冀の字のしるすらはあくさ
なり
又いさせはむかつをめへの
なにはのみなとにふ負きかしのちら紀山をたかれさし定ひ
しる美女をいふとそ併しあくり花まかひてりてさそ係は
背の上総末珠名娘子をよめる哥にもその身の
つくしけさに花としえをてそれかしいかにしきたかつす
とある愛誰妻ゑとく
ますらをれんなりおこし
ころうんをえけまれしく十七番にも大惑のまけのますらし
須めるをのんなりかおしとひつかまあすし遊行の哥にかまま
本むしるれ出さらくてまし八年十九番十三がむしるれあさ
さらゆけいるとしあるにむしるれとくちかつ迄て立出つき
にそて出かま八以で群るれ出立がくすらにちあしれいやし
ゆき国をさそるれ以下八首二十八人九石見よりの行の時の
ち哥れ人るりあしのちるかにてつきあくとふた人そそり旅る
まふへむけこうんとあ防人か哥ふつくし〜ふ船むかる
船とよりさりてふとつらせる時まさむしふは潮とうかしひ風を
そらるさし日本紀ま候風とも候海水ともを守とま大ききこえ
てはりしふともあり喜ずすとあまさらく志ずあはきく
みりそろくいるらくさ身あにも此下みもそろしとよりおひ
みやれそこしたかりく
衛士人別弓一張征箭卅隻　和名集云唐式諸府
征箭和名曽夜そやと

いふとかけくれよしとハいへり温多れかくもくもうちやく
背は扇つる稲矢もれよきてうかとハいへり又さらりあはくな
けハ岩ふうる絲と背ふひくくあるぬへし背十二ふ
まちかけて妹とおもひて布おれ柳もれよまみけきはかかうも
背十三の七年まる若麻れひしとおもひそおけきつかうも
とよ絶ゆれよそれそくるり
あしへもえへも春れ旅さ
あしへふ見えねまして国のかくえやらんやうもあきらんと
うく衣すれふとりつき
背ゆふ
衣手ふ麻とこなりなくとても河れる岩を雲ていふふせん
はふしいへるハよう子としあきて夜きぬや恋ゆふうちあれやく也

雲てハ春ねやとしもえ由まく雲し恋れきねやとしもすむおも
かしふしてハ面白かりしといふんを伊勢物語よもおもふかしと
いふハあれ母道ハ母なりしてや母ハ子なをしくまよう
信良れ子のあるらんその母とちかうかしは前よかる大
鴻ハやもめ女通男ふくありけむなりへしうりてちハさまき子を
こあらくまうふく心ありし屋かへし

少縣郡

和名集云少縣知比佐加多

ちはやふる神れさかふ
背れよりしこうや神れさかりしよめるハ足柄れ坂こ今神乃
みさかといへるハ岐蘇御坂也
あをくさの

まつ雲ハ也たゑくきぬらんさぬるかしこ怨ハ怒の誤く
にあしひもうを
ひもれをるなり

牛耳　仁徳紀猪耳津（今猪野村）飼鷹耳邑　（宇之加比）

いふろうともつるとうししよ
半十一小独ねしこもくちめやもあやむしろをふるかみゝくふ
まへをしまりん
私かいそろふ
天ハ助役みく我家しゆうも人なりハゆりん人なりなり
ひなくりりうすひれさりうを
うまひを日本紀よ雄日とよ旡ありりれくりりて影れくまうと紀
日よいふんかよつけうりかす十けふハひれくれようすひれ山をと旡
つけうりな身もひありれうすれんえおあし文本（昼）くりうをおはれ
されもハ上へのれハるのんみハいりし今とおれし

上野國

上を經く下とを

上毛野君駿河勝宝二年
三月戊賜中衛員外少將從五位下田辺
史難波上毛野君姓延暦十年四月乙未
近衛將監從五位下兼常陸大掾池原公
綗主等　池原上毛野二氏之先出自豊
城入彦命其入彦命子孫東國六腹朝臣
各曰居地賜姓命氏斯乃古今同百王不
易也伏望因居地名蒙賜住吉朝臣勅綗

主兄弟二人依請賜之 以上續日本紀

よろこびたまへれは

我々ともかしこまりてよろこひ和訓にも音讀かまへりても

れすそは御裳の裾をつまみあけしは古のすがたとかくてるなり

うきるそは子のかしらをうちかけて衣裳を袖くらべて

ちられみえしは貞十九年慕根勇士之長歌にも

れそしとちぐれ著れちきのみこともよくいひつられ

すゑゆましはせりそくつれ志ひけれはゆ貞之

小墻上節女の奇ふくしくもの志きされくふしてあ

られたりしくもの白き角なり鹿の角かくしも白け

まてそれみえしさく志つきてはくるも白まさしと以ふ

今をも以多まあかるの白ひけられは角の志

とふんをもよくみ泣れたへらりをそ泣れなしなく

和名集云黄帝内经云自下謂之兼泣 急反

和名奈美太太利 あまたは今の義にあらすあるけきみなさまつく

あけきてのさまいくなりけこしもそひなりしてある

かこは鹿兒之 和名集云鹿兒 亦作麛 和名加呉 音九尓

も始るきを法すしふ鹿のひとつこふそうこもすると

いへるしもの子うひともとの菜まなりひすゆけそ示と

あり務ちかのうなしきはつこかしてれうのきこうかし

ひいませいこさいふかくこのおわくかこと旅ゆく貞貞

窮問答歌にちくいは槌のかふめことをもあとすれる

小うこそ旅くうまひさかしひと山上憶良の歌よままさ

うふなりそりもあらくひその古意さまてしひすこと

人丸の高市皇子薨しまし（け）るときよめる哥中にもことさへす
のさまよひぬれハしまありけ十九にもあしひきのなりひとたれ
てうちひすの林のこゑときこしありたま今も門し
く書るしかりけるをいふ卅二に和名を用ゐるせりきまさの清紀
いさむる志とふに思ひはきこえをやあることにいへ祭紀の酒お
うしさ紀しおるかんなハ語なり卅十一の雜記哥にもおほさ
きれてきしるかをと人分りしひけともあり
いへんれいよへよりあらん
いつへいいふひよりおもんよう神をたつをまくいつへよれ志るし
まやおらんさひさうに新あらしうるに親に告せさし
またまちおしに麻てき
ものゝふハねる時ハ太刀を抱くにそてねまきて海くうた

ちしきいつりせろうめきこえんハせろうハ出見えめきさえんかま
称出見えたりまきハ羅の字みてくまうり泃とんのんく清く
此志うわくき月の志うまぬし

檜前 比乃久麻

うつくしけまこかてらなれ
うつくしき真子かまえかれハ卅十九に萬のうつしまさ
かとと郭公のこゑよりか孫をしあつしの

秩父

秩父郡　和名集　秩ハ秩なるへし
志うむをてふとりりしてふるの事も
まふとりおそふるこころすハふることくなりり哥なり海
いとをきとこそありや經のもやいつゝ母をとさうさまふうつし

わやまさるゝくまさえてくむやもなるへし

主張

よまいふへてし

まさ孫せるいふ称かされハ

まさ孫せるいつまあかりれハなり

椋椅部 久良波之

これハ年渡ふかへもて出流かいろくハかしハえさしといふ

てと葉之馬をにりしうちくとハえさしハ今馳れんといへり

加と佐と同韵お通れハなり今来るかちふくもさ通

るれ加と奈とハ同韵お通志と知しまた又同韻ありこり

かにてハ摘菓てありし由ちやうんハちようかやうんあり

多麻 れよこ山ハ乙し 多麻郡ふある山きやさ十四り

まうひきれまと山つゝきとよめる所よ出遠ありしおりてしあれ

さ國衙ちかしね所よ入てされハ同名にして実おかなや

りやまのかたる山つゝき

うさ山なりかうる名し わりかたの様くかりてまかさ日本紀ふ

も脚日来北傍山といひ并十二坐にわしひまれ

うさ山さし次といひつかりさ山てまおてなれハ湖ふ海なりわ

かうさかれなるさ称まうしやつあふ知らもかあち

むかもく妻の急しれと様ふたへて海もしに海なりてふ

きぬかふ地ふあらむや今やうく海なかくまとうんてま

てよし

荏原郡

荏誤作雀

いろみはおもしろけれども

いろいろはいろの例れ勘定にしく家しわしふは芝火にすまよ
けはすくなきをもて廿十六に
なるはいへおしめなくやれすてあれとおのかつまとりとこゆるき
けんくおふしけもいはまた恋しくもいんやもいん志摩もいへをよ
略したまへ東舟かても集中にいふてもおかしき
わかましつけるとれのりもし
はけ枝しつりよしおりひてつけよとくおのかいふへまをとお
まのといふるさ廿三やも神さひをるかこ道の水流しよ
ありけ舟といて今にかるかはるとんれわたまさるる舟なり
廿十二廿十八也

二

けいわきて妹しかりれいは浜中へやしも我ともやかしておかひすのを
藻花さひのおきみをおもみして村をも海となれんとのもか
これは吉根のたれ舟に書の遊しき
けのゆくよれはきは浜くしかは
我さひゆきれゆへに海のいきをみけきしかはこそよいは雲を
岸をふ雲とをやこふをつもひふれり雲を入れをかて御さま
は岸をふ雲といふらしこそいふらのたり
おもいとりれし
おひるとろにくやとろまていふ緑とろにしいふを恋しもと
いふを恋しまていへれのてしこれは上れ舟の遊し之中に
昔年防人舟八差れ中れ中にれ舟まてつくこれに同し
処つくしへをつくしいいはいひおひをえひといひおやふらも

祢もおやよりも

服部（波止利）皆女（太客末）

和名集云皆見（参河碧海郡）備中英賀郡附ると

里ハ機織く多於及登なるゆへふえとりといたれ里

くれはとりれともしるくあやはとりて用ひきこえまいり

わしかくれこさりましりして

立てこしいそうるいもと家ふある嫁くしさぬやまこともかもさやか

ふらんのもとあまさくまこふおくる哥こし

和名集云埼玉（佐伊太末）

こさりたなしハ

久さりこをしりへ手何れハもし皆濁音之

二月二十日

あまてりさ祭ふおそる礼哥あれハ二千れ年ふ字あらしよりや

しるし

安曇宿祢

癈帝紀云宝字八年十月正六位上安曇

宿祢授五位下

さ祀りりふゆくるたりせて

ようふあれ支君をかけしくおりふ書をおきてきねつあまり

あく情ありこくふへのろきさしともしさいすく殊まくし

とのもとをとハとのおりひせれなりゆのこくなるをとのお

りひもとねへなれハ多彼ゆそておもしひやるんもなきなり

あおつしれ祢ふねさおき

あおつしをあおつりなりエふもあおつしれいつれの祢と

いふ廻りぬきおきりぬきをおきて紳にまるく中すこり長
屋王の骨にもさかさまにかしの手向にかくぬきていとよ
こ弱くりあまをしもいつれかしおもいくなりこれを防
人の書の序なり
いゑれいもろ
家の床にこもをしれぶりし家綾志の家にこ入中あすひり
ゆるとひしひもれとくくりへいてむすひりむす
ひし繩の事あり入のこと
こもやなるたかいそ刷こ夜のおくるえへ中のいひしを
尉まはなりの弱の縄おて馳敷いそやきとのこおくるかくは
おくもくりのこ旅よまの出行時その書の志てひて我を
をくきんものかいさちてうん世ゆく弱のぬくおひゆのん

あしなくしいひつくをおききくまあるかかしきこく
尚書云朽索之馭 六馬集注云朽腐也
朽索易絶 六馬易驚 平貞か哥に
川にせくたかにいよりて妻弱の法なりすなふるをふるときく
あれとのいかさまいさこく
あしをいおちをく獵師なしといひりいかさをさくくを
五百矢を拔なりやし仿と肉弱めく通せり中十之
小たつまのしかさのりぬくとらふ処ふ日本紀にも矢
鈎さしといつるおもあるを引く洗せりかおましつくい鹿鳴
聞なり 古通ゑ中十に
あうれおてもこれりふこすつかれ食者ましつくみちあれも
ひきとく

此哥に天せうりけむとおほくくるゝ出しそのころくるなりけり哥
れんちか猿師かおほくれ矢を投て比叡山におほく麻絡禄に
此康の隣なしまゐりてとるとく涙あり出しこんと
ていへ涙にかしまゐりてそのくるなりかく十四に人まうれ哥
けり
　むさねれなおしまつて哉れ姉にとのいはせてさひをつと
哉哥十四にもありけりしつむとはさ須さひあれ座し
さる哥なれはやくさもまうす
十二人も哥にさまれたりやまとさやうにとくれともある
小円しまやくるさまくしなしへかえ七言哥なりけり
藤衣やつきかさねていぬれはも祝膚さむし姉かしあるをは
十四に

あつさすあそこやうやにふせれはる姉しねれはたるう宮しも
こゝろのいさいつくやしなかんとあれるへ日哉代哥れあうつま
いやしみをそひし御とふにあるとくうろへし
さへうへねつるとにあれは
さるりなきこみとおりうれのこ

紫微大弼安倍沙美麿朝臣
孝謙紀云勝宝元年九月戊戌制紫微中
壹官位五位下官大疏四人従六位下官
少疏四人正七位上官宝字二年八月庚
子朝大炊王受禅癸亥諸臣奉勅改易官
號紫微中壹居中奉勅頒行諸司如池兼
天亭廢物改為神宮官天平九年巳亥正

六位上阿倍朝臣佐異磨授五位下閏七
月癸卯為少納言十五年五月從五位上
十八年四月從四位下勝宝元年四月從
四位上宝字元年五月正四位上宝字元
年五正四位下同八月参議二年三月辛
酉中務卿正四位下阿倍朝臣佐美麻呂
卒

昔年相替防人歌一首

令義解云第五軍防令云欽至所在官司
預為郡口 謂官司者防人司也預為郡口者謂防人未至之前依旧善配預為分自送猶太宰防人郎也相替也古類故天分付也 防人至後一日
郎共舊人分付交替使佐 謂主當之所有器仗

やこれゆくさきしらしも
才十二しも
くりかえしつなき山越へて峯に君をはいつとかまたん
とまりつ才九すあるやくとかたおりひ滝とそまとしかくし才十六ま
あくりりかれかまへ枝なとみとまあり

先太上天皇

時きれてしおふいつまゝく元正天皇し
かくきて移もうつりなん
あれハ元明天皇崩御の後なとふかせのまつす御哥ますや
何となつられハ之御哥めんハあつぬかくきてハ移もなつうむ
とおりけまされハす忘まれおくりまのくよし移くまとつ
人被々付侍く称をいくことをよまよま世へてまへつきしこれまと

此人は元明天皇をさへ世のへるやうにをうけたまはる背十
みまかりしきれ給ふもとつくしよりいかしへより罰況な
とのひ給ふべりけりさしてもきけはいかなりし故にふかくむかし
れ志のなまぐさきにしたがへもとつ人をはうけさせたまへる
なるべし

陘妙觀應

元正紀云養老七年春正月丙子。大宅朝臣諸姉薩妙觀並従五位上聖武紀云神亀元年五月辛未従五位上薩妙觀賜姓河上忌寸天平九年二月戊午天皇臨朝授ヽ従五位上河上忌寸妙觀大宅朝臣諸姉並正五位下陘玉篇云下丁切限也

山絶也又懸名氏ふくはいふもむべしともつきせん
を讀し
日本紀に薩妙觀とあるを所にてわれは氏集にあやまり
てるたるへし薩は常にくも薩人のいふなしあるはいまる
るかれ氏なるへし妙觀は女子にもまきすべし
下四十一葉陘妙觀命婦とある
かくきしおふちかくを
ちかくをのをりし御作く校もかりかんとある御返しなれ
まぶ今はおてふちのく事なりし此何るまてく後まかいかなり
なくともかひあらしといふなく御製ぬをしめれ二句り
かへしふてまかれるて勅令を布しきすふつかるやう
みえかり斉れさまいとやさしくきこゆ

靫負御井
光仁紀云宝亀三年甲申置酒靫負御井
賜陪従五位已上及大士賦曲水者禄有
差
松かえのつちにつくまて
雪のふりしくつもりて枝のさかりし
水主内親王
日本紀第二十七天智紀云又有栗隈首
徳萬女黒媛娘生水主皇女聖武紀云天
平九年二月四品水主内親王授三品同
八月辛酉水主内親王薨天智天皇之皇
女也

立しなふ君かすかたを
志かすやかありし十二年にあさいは井との川といふ小菅とあを
ておまへかる聖てうちしなひて転てわかまし治せり
うらひすのあ忽は道かとおりえとも
道ねと時乃道なかりし五月九日なれいつ志もふりしみいありと
にしのこ労をおりしわくおひりくしかんもや立す
頭源くたるふしんおもなりれ都小年の屋ねへく
わのやとふさけるあてしこ
かひさせんとうはかひおひはせんとふあまさまし親し
いやおちまさけはあまりりす忽はいよし名しくさけと
いふらへおちは彼の字之事つくれ音ふきあふよりをち
をいしらむとよまれしつまきさ紀銀はいつ此条りむ

春にけふあらたまりといふハあたらしき春をいへり此哥ハ
橘左大臣のまつるを賀してかくいへり
そしこの花のさかん君かしるらし
梅子の花のさかりに君をといはんとて

右一首左大臣歌

疑歌上脱和

あらたなれやへゆくこともし

和名集云白氏文集律詩云紫陽華 和名阿道

作為 しもつけ花と後ふかきて まさしくと此な

道ハ八帝としてよみとのへりやけにかをいふらし七八十もいく

家人かしふれをハえりもけさらしいませといふなる

うつりし

晴くみく熟れ家く寺上につかく桂隠くしくまと
しあるま國し土佐日記にもあめとうつりしかくえり袮
のんとすれいうつまとうけて給ふも花ちりしんとい也
てるをとうつりくしてんるとよめり

左内南殿

天武紀云十月春正月辛未朔丁丑天皇
御向小殿而宴之是日親王諸王引入内
安殿諸臣皆待于外安殿共置酒以賜樂

をとめくるもすれひて

玉とハ裳をあむる裾く寺上に人丸哥に
あまをとめのさんをあしらふをかけまくにや清らん
寺三にハ紀家まもいひつちとよく寺十七にハ此川の瀬ま王

もぬしつしあり

秋の世のなきことぬ志る家花乃庭
姫凡の吹しこ現しあさへ秋の花ともをこきおろ人くちせ
家ふよりてかくいふ　　俊頼礼奇小
てけしさ山おろしにたとへいひて花の家ふ残ともお多きん

天平元年班田之時

令義解云班頒也田所以殖五穀之地也

續日本紀云天平元年十一月癸巳任京及畿内班田司。又阿波國山背国陸田者不問高下皆悉還公即給當百姓組在山背一国之三位已上陸田者具録町段附使上奏以外盡收開荒不同下皆悉還公

おもてはひろかなひて
も流れいゆくたゆひていまてよいかにと志のれて班田ま
すみててみかなあしく立てれこそるんこ才七志自すり
田にま立らるくるともあるてにしひろれいつまるまさふよりく
夜れいしかまゝ此芹を流れてまわりすれいんさし　れ卯
をよみて迷ふとしこ
まするおもおりゐるとの哉
近しのものはまつをいこしこそ紀すするをとれこおりひ流る
みなさけ多て太刀をとるまゝかりかまいれ田井みいせりを
流くそにまへつまろき迷しきしいふんこかまいれ田井い

棒田井也　延喜式第五十雜式云　丸山城國泉川樺井渡瀬者官長率東大寺工等

毎年九月上旬造假橋來年三月下旬懐
収云々、泉川梯井済とあるも此の事なるべし　左大臣云々此頃ハ上橋の跡なき也
にのせられたりしされハ今も入るなり

天
平勝宝八歳の戊申
此下ニ天皇の二字落たる紀
續日本紀第十九勝宝八年春二月戊申
行幸難波是日至河内國御知識寺南行
宮己酉天皇幸知識山下大里三宅家原
鳥坂等七寺礼佛庚戌遣内舎人於六寺
誦経襯施有差壬子大雨賜河内國諸社
祝（祝カ）祢宜等一百八人正税各有差是日行
至難波宮御東南新宮三月甲寅太上天

皇幸堀江上乙卯詔免河内摂津二國田
祖戊午遣使摂津國諸經襯施有差此孝
謙紀を引てこゝにて皇の二字おとせり紀にハまさしく太上
皇太后も法皇に御座ありけるを先ひて勅して三月甲
寅朔に太上天皇の堀江上に御座ありけるやうにかけり紀
せられさる紀の紀録のつゐさかりけるにやされハ古き紀孝
かれてみな還御の日まてをしるせしを此ひの行幸は還
御をしるされ今年二月太上天皇ハ崩御しまひて
太上太后の物の太の字ハ衍文なるべし　経信ハ荘三
年左傳云凡師一宿為舎再宿信通信為
次今二十四日より二十八日にいたるを經信といひては信
といへとも通るあるは経も再信夜信たとといへる

を宮れおちりけるかや

伎人

伎人郷、

日本紀に伎人をくれとよめり伎人と乗る郷にて此
名を附るなるべし　孝謙紀云勝宝二年五
月京中驟雨水潦汎溢又伎人茨田等堤
往〻決壊馬国人下に馬吏國人とあれはむて
ふと馬吏とありけんかおちしけるかや

すみれえの濱松か根れ志きいへく

松の根のふとふまに浦傳事しけり志きいへくは下なり
おもひ出をといへり中九中十四中十八にもよめる詞也今は下れ
此よあかね心れうちえてしおもしろく見るに覚れ葉
とふかくなりけれとこ　すみれえのといへるは難波より住吉
へみゆきせさせ玉ふ時れ浦傳ひとせられけり附より國人々と
と人々とよみて　おもくれりえたり

にふかるれおほえなるかりく

息長河は近江坂田郡にあり中十三に志らきてる浦くて
きの如く息長れとおちれ山吹とつ事よめる哥に日本紀
等を引てにふかるは息れなかくて水の中へひさしく揺く
ゐる事はかくきつけたり又中十四東哥にをゝもれもこゝろ
やさかなるいくつくかとよそつゝよめるに准あれはふかるれなを
出くされたる息を　か息紀にふかく息長川もつけさ
てともすゆ又十代まにふかるれかゝしかりせとつ事するは
かゝくとのへるんく　此於吉奈我河波を奥中河と
かはかはおかきに謬也りにふかるのといへる心をもとめ

須吉の我りしをうけまて心をもつけねく君にかたらんことつき
めやもおきて上の御社の前にまうてゝ我かゝる事よしへこまま
はおもしをよろこへていつ連ハかれまあつしんく身十あり
りうつしの海にいでて白志うみ川なへん日ふうそりうこひやまあ
古新未詳し次せうへ息長川を出ろすく時にうたよみと
ふれんハよくかうへハ古今の人をはくあるしのあした
てなく又いぢよくいでてうなきあるらつきゆへて
あしうりにありえこじてまる
あしうりに須もくありえあく能く身三に
ちなのちちてすゆあひまさとあこそ始あるあなれよひこゑ
ありえあくいつての舟の
いつての舟にしにさきのりのありえこき出るいて舟とあり

うちはくめハ古流の枕に来めるへこよの守り今業立と須ぎ
日韻あく通されハうちすゝくめといふうしやみをれハ也
いやきく舟に櫓をあやくなそおしそさらのかる心へまして八
掛かくいふへれことりもあきゝうるゝねすをとりて能もえ
いそねん乃ことりあるなれかくいひるあるを依にいひす
くむるといふ旅なうへし音しハ立ねハ志かしく　音れ
立ねく年七に
はるうけてありえこくなる杉浦舟ゆちをとしたりしまとえぬをかな
○一ふなきあふ堀江の川
ふなきあふハ舟競なすり家さきこと漕出漕入ゝ身一人
丸の舟まゐなへく能川よりふねきあひ夕河り
よりとよるゝ代恵よまハ能なきくにうちハ川のあり夕

しかに伊かさし〳〵つりあちむしかれさハ旅きならひて
とよかりまさに飛んで〳〵といふまことをすゑハ〳〵馬の心
に似たり今の心にあはれ哥ハ伊勢物語りにあるきある
れなしとあしきあきたれおなきさうたるなれよに
あれひついふことに飛これ為人哥とかの道ハ学氣なし
大かた驕れ哥にくうち涌しそてあれふこれを流布
伸しひたすらし真れきなひて出づるたる所に基ゐて
なくいかさへ哥事ちも思ひをあつてよあるなんそ

右三首江辺作之

ともに家持の哥こと第十九云但此哥中不偁作者
文字徒録年月處縁起者大伴宿祢
家持作家詞也これハ十九哥にかぎりていひ
おもひを準じて知べし
かしこき段なけつ君か
君とさ仰せ書く、かしこきすし旅にある家と独のけて
待とふ心りつけさりひもと記さるるハ第九に細れ読ときて
家のことゝけてなあはれふをいひたることく心のしるし
又夜乃紐ときくといふ道にもあるべし

喻族歌一首并短歌

喻者示喻也并誤作弁

久かたのあまの戸ひらき起さうちかれそけてあもりしまぜめる
きみ神のみことり
日本紀第二ニ　高皇産霊尊以真麻覆衾
農天津彦國光彦火瓊〻杵尊則引開天

盤戸排今天八雲以奉降降之于時大伴
連遠祖天忍日命师来目部遠祖天槵津
大来目背負天盤靫者稜威高鞆手鳴鏑
又帯頭椎劔而立天孫之前遊行降来至
於日向襲之尊千穂槵日二上峯天浮橋
而立於浮渚在平地旅内宍空國自頓丘
覔國行去到於吾田長屋笠狭御崎。日
向國風土記云天津彦瓊〻杵尊離天磐
座挑天八重雲稜威之道別〻人物失道物
色難別於茲有土蜘蛛名曰大鉗小鉗二
人奏天皇孫尊以尊御手抜千穂為籾投
散四方得開暗于時如大玞等所奏稜千
穂稲為投散四方即天開晴日月照先曰
曰高千穂二上峯後人改号知鋪和名集
云曰杵智保　いふもさらなり八方に天降しかりける二十
九ふもよあり　いとねきくて方二以下はまたゝけり人哉もや
いし侍なりけるをまあつまへまかりをしく以上忍日命の神代
功勲く以下神武天皇の時のことをいふにありあはりけしますや
まことのみふれのしかりれり初ひのこやりし
神武紀云戊午春二月丁酉朔丁未皇师
遂東云〻　三月辛酉朔丁卯令曰。観夫
畝傍山東南橿原地者蓋國之墺區乎可
治之是月即命有司経始帝宅。辛酉年春
正月庚辰朔天皇即。位於橿原宮是歳帝

為天皇元年故古語称之。於畝傍之橿原也、太立宮柱於底磐之根峻搏風於尊天之原而始馭天下天皇號曰神日本磐余彦火々出見天皇焉初天皇草創天基之日也大伴氏之遠祖道臣命師大来目部奉兼密策能以諷歌倒語掃蕩妖気倒語用始起乎茲卅一年春二月甲辰朔乙巳天皇定功行賞賜道臣命宅地居于築坂邑以寵異之又上云是時大伴氏之遠祖日臣命大来師大来目督將之踏山啓行乃尋鳥所向仰視而追之遂達于菟曰下縣因號其所玉之處田菟田穿邑

穿邑此云于知能務羅于時勅譽日臣命曰汝忠而勇加能有導之功是以改汝名為道臣

つき〳〵家君のこゝろし

景行紀云天皇則命吉備武彦与大伴日連令従日武尊文云至甲斐國居于酒折宮是宮以靫部賜大伴連之遠祖武日也　そのゝち大伴室屋大連大伴金村連なとしめ〳〵代〳〵忠功ある人相続〳〵こゝろさしね
あきんをかさふかくしさりしねとやすへに小んあきき云れかく
さふへしやとゝのへ卅十一小奥津藻をかくさふ浪とよ
家よそよ不隠障とかゝりし志これはかくさいねはかくしさえ
ねなりけりしかくさねしいふ設古代の習ふしかくさりね
といつまても有色しと守るあつきさんは長流といふ明なる

心こゝろのうちにれいたんなる紀のごとしといへり日本紀に赤心丹
心とうるはしきこゝろとよめり又丹心誠心とかれんとよめり黒
心をきたなきこゝろとよめるに習してあしきへ赤心とやあるへ
きわりきくろきこゝろのものはきたなくあしくまる事多かれ
まれは黒心赤心とはかりになるべし　文選阮之瑜
為曹公作書与孫権曰若張内花子布外
撃刘備以效赤心用後前好則江表任
長以相付丘布範与陳伯之出曰推赤心
於天平安反側於万物　あるあしくへはあかき心乃
あかりてやや十十八ふおあかきこゝろこれへしこゝろしなおもよめ
るふ同しうこれこの子孫にかきて日本紀によめる子と
孫はいうこの子のやまとつきにゆかりつきてかかりつ

くなり真氏と五音通せり古人は続ふせんも
貞観政要云以古為鏡可知興替以人為
鏡可知得失　あかろゝは上ふあまきこえよりあかる
まこいんかあるしむねこともいむまことそもて孫しもし
麻しなりし同類ふしく通せり又空言もといふや心は空
言なきは通ふれ満こゝちなき言形通はなしふれれともいふそ
先祖の名をたてよといふんとし又たつなは断絶せしむると
もいふへしまとりそのともはともかしこ
なふおかしもれをおろつしめよ
とんは雄々しくとのこんし
清きこころいつくとくへし
中十三ふも清きこころきとやしんをもそ云雲よあかりひち

らしてとゝありそけむをいのりきやけくおひてきふし
そのおやいきよくおひきつゝし

淡海真人三〆船
勝海真人
姓勝宝三年正月賜無位御船王淡海真人
上大伴宿祢古慈斐内豎淡海真人三船
坐誹謗朝廷無人臣之礼禁於左右衛士
府宝字四年正月癸亥朔癸未尾張介正
六位上淡海真人三船為山陰道使五年
正月従五位下同月参河守六年正月文
部大輔式部八年八月美作守同九月正五
位上神護二年二月賜功田二十町同九

月丙子為東山道巡察使神護景雲元年
三月庚戌朔己巳兵部大輔六月癸未勅
東山道巡察使正五位上行兵部大輔兼
侍従勲三等淡海真人三船稟性聡慧兼
明文史応選標挙衛命巡察諸使向道之
時受事維一有者還報之日改路漸異存
心違撿估酷苛以下野国々司等正税未
納并雑官物中有犯然禁前介外従五位
下弓削宿祢薩摩不預鑒務亦赦後断罪
此隙巧辨其理不安永公平宜解見任用
懲将来八月太宰少弐宝亀二年七月刑
部大輔三年四月大学頭正五位上淡海

真人三船為文章博士八年正月大判事
九月二日大学頭文章博士如故十一年
二月四位下天應元年十月為大学頭延
暦元年八月兼因幡守三年四月刑部大
輔大学頭因幡守如故四年七月庚戌刑
部卿従四位下兼因幡守淡海真人三船
卒三船大友親王之曽孫也祖葛野王正
四位上式部卿父池辺王従五位上内匠
頭三船性識敏捷渉覧群書尤好筆真人起
家拝式部少輔参河美濃守八年被充造
池使往近江國修造彼池時恵美仲麿適
自宇治走拠近江先遣使者調兵馬三船
在勢田與使判官佐伯宿祢三野兵捉縛
賊使及同悪之徒尋持軍日下部宿祢子
麿佐伯宿祢伊達治等率数百騎而至焼
断勢多橋以故賊不得渡江奔高嶋郡以
功授正五位上勲三等除近江介還中務
大輔兼侍従尋補東山道巡察使出而採
防事畢復奏昇降不　頗乖朝旨有勅譴
責之出為太宰少遷刑部大輔歴大伴事
大学頭兼文章博士宝亀末授詞畢忌部
宿祢色夫知奉上神璽釼鏡於皇后皇后
即天皇位

あらたしきとしのはじめの

いやしけよごと

五年十一月戊辰大甞会神祇伯中臣朝臣大嶋讀天神壽詞續日本紀第三十九云延暦五年二月己巳出雲國造出雲國成奏神吉事其儀如常

延喜式第一云中臣進就座宣祝詞

右いつまでもよごとゝいふハおなじ心ハ續日本紀に吉事とかけるこれなり今む月ついたちにはうきを述る天智紀に西事とかけるもふるくかゝるありける事雪のことく賀正事としきかさ〇よしや元日は雪のこと

史記天官曰四始者候三日正義曰謂正月旦歳之始日之始月之終ロ其雨雪故云四始言以四始之日候歳々吉凶也

かくいはれともおなしく雪はふる錢よろこびにふるなるべし

孝武帝大明五月正月朔日雪降義恭以衣受雪為佳瑞

此集巻十七に葛井連諸會

あらたしき年のはしめにとよのとししるすとならし雪のふれるは

文選謝恵連雪賦曰盈尺則呈瑞於豊年夫則表沴陰徳

そもし萬葉集のはしめに雄畧舒明両帝は民をめくみせたまひし世のおさまれることよろこびおほしめしける御歌より次第に載て今此集をとりて一部をそのへにまとめしたる此集をすへていはひておしくつゞりて終おはる民をみちびくすけともなれと成也し

蝶夢菴二彝齋閑吟亭恐可高臥床瞿麦
翁春、風軒竹馬子高宜
享保二歳丁酉正月十日書始　同歳霜月
十日写終

日本政府図書
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan